The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	被服部会研究例会報告
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1965, 4, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52456
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

被服部会研究例会

・第5回研究例会

日時　昭和39年12月19日（土）　　於京都女子大学

演題　「被服美の構造について」

成安女子短期大学　　板　倉　寿　郎

被服美表現に際し、感情表出が被服表現となるには次の原理による。それは、まず作る時　①用途的社会的条件を考える。②自己の気分をあらわすように選択する（被服的雰囲気を生ずる）のであるが、気分の表出に装身を媒介とするときに被服美が成立すると述べられた。すなわち、作ること着ることは装うことによってその独自性を獲得するものであるとし、人間と被服との関連のあり方のひとつの姿として装うことを指摘された。

研究発表会終了後、有志懇親会を「きのえ」にて催し、午後8時頃散会した。

・第6回研究例会

日時　昭和40年5月22日（土）　　於大阪市立大学

演題　「欧米各国の被服の印象」

三越主任デザイナー　　高　田　千代子

「ヨーロッパ人の被服観」

京都市立美術大学　　元　井　　能

高田氏は昭和39年に、元井氏は昭和35年にヨーロッパ旅行をされたが、今回の研究例会は両氏にヨーロッパの被服に関する講演をしていたゞいた。

高田氏はメキシコ・アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・スイス・北欧における被服生活の現状を各国比較しながらデザイナーとしての鋭い観察で得られた印象を語られ、数多くの興味ある問題を提示された。

元井氏はヨーロッパ人の被服観の究明に考慮しなければならぬことは、その風土的な解決と風土に根ざした社会環境の理解であり、例えば、ヨーロッパにおける歴史的な事象（中世キリスト教と被服、近代フランス革命、産業革命等）がヨーロッパ人の個人意識社会主義の自覚となり、それが被服観形成の要因となっていると解かれた。自己の風土と歴史に立脚した時に正しい被服観が得られるのであり、被服部会でしばしば取上げられる流行問題の解明にもひとつの示唆を与えられたと思う。

執筆者紹介

山崎　勝弘	奈良女子大学
小山　喜平	京都市立美術大学
大場　吉三郎	大阪府立工業奨励館
高田　克己	大阪市立大学
島崎　雅夫	松下電器産業KK
北根　肇	KK万年社
松尾　秀郎	京都工芸繊維大学

（執筆順）